〔新刊紹介〕

中西健治著『茶屋峠』

須藤　圭

文学と向きあい、じっくりと語りあい、ゆっくりとコトバを紡いでいく行為は、少なからず、そのひとじしんの痕跡をのこす。わたしは、ひとつの写本を見つめることで、その写本にふれたひとびとの声を聞きとり、そこに生まれたであろう想いの束を、出来るかぎり、感じとろうとする。それは、わたしじしんの内にある何かの反映でもある。本書を読み、折々に詠まれた歌にふれていると、中西先生の研究の淵源が、少しだけ見えてくるような気がしてくる。

わたしは、歌についてはまったくの素人であり、本書の解説もままならない。先生の講義に列席したひとりとして、その研究とかかわらせながら述べることで、『論究日本文学』へ寄せる紹介としたい。

中西健治先生の第一歌集である本書には、浜松中納言物語をはじめとして、源氏物語や夜の寝覚にも及ぼうとする、研究者としてのスタンスが歌われている。

注釈は思うほどには捗らず三百枚書くも十行のみの本文
読めたりと夢には見れど古写本の一字不明に悶悶とせる

写本の一字一句の正確な翻字からはじまり、その読解に無数の原稿用紙を費やそうとする姿勢は、物語のコトバにこだわり、丹念に用例を蒐集しながら読みすすめていく先生の研究そのものである。

だからこそ、いずれも研究のひとコマでありながら、それぞれが、コトバへの関心に満ちあふれ、歌が作りあげられている。

歌会の帰りはいつも五七音物みなすべてに貼りつけており

先生の研究はまた、先行する研究への畏敬の念と、講義で接した学生の意見に対する尊重が、常にあるところも特徴といえる。そうした意識は、次のような歌となって立ちあらわれていく。

卒論に思い幾つか付箋貼り新しき知識得たりとも記す

あとがきに、次のようにある。「過ぎ越し日々に心を馳せ、湧き上がる思いを豊饒な定型に流し込みながら組み立てて行く思考作業は、平安文学の研究とはほど遠いところにあるように思えるものの、案外と深いところで結び付いているのではないか」。歌人としての姿と、研究者としての姿は、一体となり、表裏をなす。

おそらくは土手の向こうの夕顔よ源氏読む間に忍びこむ香は
通勤に妙心寺境内往来すこの時ばかりぞわれは詩人（うたびと）

本書は、中西先生の研究を知る上で、欠かせない一書である。

（一〇〇〇号記念ポトナム叢書、ポトナム社、二〇一三年十一月、一七五頁）

（すどう　けい・本学助教）